

松嶋夜話 卷之下 67

〔原文〕吾國中將藤公之華胄、越前少將上年元文丁巳天貺節辱裏台命

〔訓読〕吾國中將藤公の華胄、越前の少將、上年元文丁巳天貺節、辱く台命を稟し

※天貺の節：宋の真宗が祥符四年に定めた日（六月六日）。日本には伝わらなかった。季節夏

〔原文〕肇而入府

〔訓読〕肇めて府に入る

〔原文〕次狂駕松島且設大亨款待方丈

〔訓読〕次に駕を松島に狂し、且つく大亨を設け、方丈に款待す

〔原文〕茶話以聞山之繇來

〔訓読〕茶話以て山の遙來を聞く

〔原文〕此夕因有問訊者云

〔訓読〕此の夕因に問訊の者有りと云う

〔原文〕願尋今朝公譚記取

〔訓読〕願はくは、今朝の公譚を尋ねて記を取る

〔原文〕異日爲觀光者則必是矣

〔訓読〕異日觀光の爲にするときには、則ち必ず是なり

〔原文〕仍信筆記之

〔訓読〕仍て筆を信じて之を記す

〔原文〕蓋松島圓福寺前代慈覺大師開闢

〔訓読〕蓋し、松島の圓福寺は前代の慈覺大師の開闢し

〔原文〕原爲天台之山

〔訓読〕原と天台の山為り

〔原文〕鎌倉治世自從副將軍最明寺月域觀光之月入于松島法身窟來

〔訓読〕鎌倉の治世、副將軍最明寺は日域觀光の日、松島の法身窟に入り来りてより

※北条時頼公は晩年、病から執権職を辞職し、出家して覺了房道崇と改名する。鎌倉に最明寺を建立し、弘長三年（1263年）三十七歳で最明寺にて卒去された。最明寺時頼入道道崇の位

牌があり、裏面には辞世が記されている。

〔原文〕與法身和尚有開宗之契約

〔訓読〕法身和尚と開宗の契約有り

〔原文〕改山爲禪林

〔訓読〕山を改めて禪林と為り

〔原文〕遂爲法身於開天祖矣

〔訓読〕遂に法身の開天の祖と為る

〔原文〕法身之先松島之鎮島有御島矣

〔訓読〕法身の先の松島の鎮島に御島有り

〔原文〕昔日有精舍

〔訓読〕昔日精舍有り

〔原文〕曰妙覺庵

〔訓読〕妙覺庵と曰ふ

〔原文〕見佛上人舊蹟也

〔訓読〕見佛上人の舊蹟なり

〔原文〕後鳥羽院御宇賜佛具法器於上人矣

〔訓読〕後鳥羽院の御宇に佛具法器を上に賜ふ

〔原文〕又大將軍頼朝大夫人二位尼爲歸依上人

〔訓読〕又大將軍の頼朝の大夫人二位の尼、上人に歸依し

〔原文〕錫佛舍利及玉塔

〔訓読〕佛舍利及び玉塔を錫（たま）ひ

〔原文〕併添自染公帖而送此島

〔訓読〕併に自染の公帖を添えて此の島を送る

〔原文〕從是此島曰御島云

〔訓読〕是より此の島を御島と曰ふと云う

〔原文〕舍利泊

〔訓読〕舍利泊（そそ）ぐ

〔原文〕親澤公帖在于今矣

〔訓読〕親澤の公帖、今に在り

〔原文〕寺之鎮物也

〔訓読〕寺の鎮物なり